

## 切り上り長兵衛考－改定

令和5年4月16日(日) 10:00～11:30

元別子銅山文化遺産課長坪井利一郎

### はじめに

別子銅山史を語り始める時には、切り上り長兵衛が必ず登場する。しかし、別子銅山を経営してきた住友の切り上り長兵衛へのスタンスも変化してきている。帰納法は個々の具体的事柄から一般的な命題や法則を導き出す。過去に迫る時に、歴史的な事象を積み重ねていつて歴史を知ることになるが、出だしが異なると結論も違ってくる。別子開坑二百五十年史話を史実だと捉えて誤謬をきたしてきたように思う。改めて切り上り長兵衛を考えてみる。

### 1. 切り上り長兵衛は伝説の人

泉屋叢考<sup>しゅう</sup>13輯の「切り上り長兵衛」の序言で「従来の誤謬を逐一訂正して其の真相を正す。」とある。

伊豫国宇摩郡別子山村足谷御銅山新見立之覚、豫洲別子立川両銅山開発覚書、豫洲別子御銅山未来記の中では、「立川銅山で働いていた長兵衛が吉岡銅山の田向に別子山の鉞床を知らせた。」とある。

しかし、それらの文書は元禄3年(1690)から約70年後の記述である。2～3世代後の文書となる。

伊豫国宇摩郡別子山村足谷御銅山新見立之覚	―――	宝暦9年(1757)	69年後
豫洲別子立川両銅山開発覚書	―――	宝暦8年(1758)	68年後
豫洲別子御銅山未来記	―――	明和3年(1766)	76年後

これまでの出版の元本は「別子開坑二百五十年史話」である。その中には、長兵衛が廻った鉞山(たからの山ー出羽・三河・美濃・若桜・出雲・石見・播磨・豊前・豊後・薩摩)の全国を回らずに阿波から吉岡に来るという誤記がある。また、「世話になった住友、すぐに知らせた」は不審。しかし、吉岡銅山も水抜きで苦闘、立川銅山にわたっても芳しくなく、財力のある住友でないと別子銅山開発は困難と考えたとの解釈ができる。別子銅山は見立てた時はたいしたことはないと考えて、2年間言わなかったとも考えられる。この2年間も謎である。

#### 実地踏査でも

伊豫国宇摩郡別子山村足谷御銅山新見立之覚	―――	助七が調査後、田向が再調査
豫洲別子立川両銅山開発覚書	―――	助七が調査後、田向が再調査
垂裕明鑑	―――	踏査より35年後享保9年の田向の手記
		踏査が1年間違う 田向の時に助七がいない

男一人を未来記から長兵衛としているが、長兵衛ではなく松右衛門である

開坑二百五十年史話

——— 踏査より35年後享保9年の田向の手記

踏査が1年間違う 田向の時に助七がいない

遠町深鋪で別子鉱山が衰退した時に、過去の栄光をもう一度との願望の中に長兵衛が登場する。史料をつき合わすと時間的につじつまが合わないのに、長兵衛については疑義が残る。別子開坑二百五十年史話の影響が大きく、著者は歴史話と断っているのに、史実と間違っただけで広まっている。

別子開坑二百五十年史話では、「廻り切夫から大銅脈があるとの報告を受けて、長兵衛に会って仔細に聴いてみる。」「立川銅山の峰続きで、南方へ五百尺ばかりも高い尾根を越してみると富鉱石の露頭を発見した。」「往昔から昼なお暗き道もなく何人も敢えて立ち入ろうとはしなかった。尾根の絶頂より二三町南に下った時露頭らしきものを見つけた。その後も探れば、広大なヒスジがそこから山頂へ斜めに走っていた。」などと劇場的に表現している。(都間歩あたりを起点にして峰を越えて

200m～300m南に下って露頭を発見しことになるが、大露頭地点だと100m下ったあたりとなる。立川銅山から露頭線を辿れば容易に嶺南の大露頭に至る。大露頭の西側上方の斜面には鉄錆のスクラップのような顕著な露頭もある。すでに三島の祇太夫が試掘しており人跡未踏でもない。抜き合い事件になると入会権の境界が出てくる。暗く生い茂っているのに、露頭発見後は露頭線が峰まで見通せることになっている。ツガザクラが氷河期の80万年前から生息しており、最初から荒涼とした尾根では見通しがきいていたのであった。田向重右衛門は長兵衛が印した場所、後の歓喜坑で試掘するとあるが、峰から500mも先である。田向は、2点調査として大露頭から東方に350m離れた80m地下の鉱床の様子を確認したのであった。田向は、横幅350m高低差80mの鉱床の含銅量が20%であることを突き止めたのであった。

別子開坑二百五十年史話では、長兵衛が印した場所を試掘しているが、歓喜・歓東坑が本鋪となったので、歓喜・歓東坑の場所に印したと、つじつまを合わせて書いたとしか思えない。結果論的記述である。現場を知らずに机上で筆を進めている。鉱山のお話だからか。)

別子開坑二百五十年史話は、不備があって歴史の史料としては採用しないようにと住友史料館から連絡を受けている垂裕明鑑を全面的に頼っているのに、信ぴょう性に欠ける点がある。例として挙げると、調査時の松右衛門を長兵衛にしている過誤がある。住友別子鉱山史(300年史)では、長兵衛の報告は伝説としている。その後の映像作成においても、「開坑は伝説に彩られている」との語りから始まる。令和3年4月に新居浜市が、新居浜市史の第1冊目として刊行した新居浜の歴史でも「長兵衛は伝説の坑夫と言えり」としている。

## 2. 瑞応寺西墓地

瑞応寺西墓地に長兵衛の妻子の碑石があるが、別子開坑二百五十年史話P 1 1 9に出ている。「相譽妙有信女切上長兵衛妻」「一譽浄圓信士同見五郎」の記述であるから、切上長兵衛妻と石見五郎は、昭和16年には彫られていたことになる。(碑石には切上長兵衛妻子、俗名石見五良と彫られている)信女・信士名の右側の「元禄七甲戌年」、左側の「四月二十五日」の下の箇所は、他の碑石の字体とは異なっている。「切」の字は「七」と「刀」が離れている。「冫」の角にタメガなくコブができていない。「一」は真っすぐでなく、起筆が下がり終筆が上がっている。「1」も真っすぐに伸びていない。全体に右肩上がりである。「俗名」「五」「兵」「衛」は碑石群の中にある字なので似ているが、ある字の「良」は違う。碑石群の中にある「石」「見」「切」「上」「長」「妻」「子」は字形が異なる。妻子と彫られたような続柄の説明は元禄七年の他の碑石にはない。どうも元禄六年の知清童女の碑石をまねている。続柄を右側に配置しており形式的にも異形である。没年月日を左右に分けて、シンメトリーにしているので、続柄と俗名もシンメトリーに配置したとも考えられる。被災者132人の中には切り上り長兵衛も妻も子も、石見五郎も記載されていない。

杉本助七の碑石「玉譽一的居士」には、居士名の右側に「元禄七甲戌年」、左側に「四月二十五日」とあって一段落として俗名杉本助七の文字は彫られている。銅役人の河野亦兵衛の釈道仙信士の碑石も同様の形式である。切上長兵衛妻子の碑石は、年と月日の真下にあり、形式が違う。左右に余白がないので、年と月日の真下のスペースに後彫りをしたとししか考えられない。

なお、大阪の実相寺の別子・最上両銅山殉職者供養塔にも助七の「玉譽一的」が彫られている。文成6年(1823)ころ作成の古過去帳に「玉譽一的居士」は杉本助七と記載されている。(住友の歴史—上巻P 82)

「一譽浄圓信士」は「信士」号だから手代の次郎太夫や弥五兵衛も信士と彫られているので、彼らと同等の人物である。善兵衛・宇右衛門・藤九郎・次郎太夫・弥五兵衛の5人は集合で碑石があり、男吉兵衛の石碑がないので、この手代に該当するのではないかと考えられる。個別慰霊以外は「当山火滅聖霊」を建立して慰霊しているので、男吉兵衛だけが残ることになるので「信士・信女石碑」は手代の男吉兵衛となる。碑石表記に信女もあり所帯持ちである。信女が被災者の132人の中にいないが、最初の報告の142人の中にはいたのではないか。染太夫一代記で記載されているように、手代らは別子銅山には単身赴任である。妻子は新居浜浦に住ませる。たまたま別子銅山に面会に来ていて被災したのか。単身赴任が原則の手前、公記録には記載せず、死者の弔いとして碑石には明記したのか。古過去帳の中に「一譽浄圓」を見つければ誰かが分かるはずである。

5人の「集合碑石」と「三界万霊・有縁無縁等碑石」の中央上部には梵字・キリク(阿弥陀如来または観自在菩薩の種子)の痕跡があり、頂上部が運搬時にでも欠けたようである。「信士・信女石碑」も梵字の上のスペースが狭く、天頂部が欠けて窪んでいる。碑石は中央部が凸型になるように形成した石で造られていた。そう考えると、左右非対称の「助七の碑石」も左側が欠けている。

助七の居士号に「誉」があり、信士・信女号にも「誉」があるので助七と何らかの繋がりが考えられる。手代5人の集合石碑とは別の単独石碑からして助七の補佐的人物か。

元禄7年(1694)の大火災で亡くなった132人の内、元締・杉本助七ほか手代3人(茂右衛門、善兵衛、宇右衛門)は旧勘場(歓喜・歓東坑)から10m下の沢下に土葬され石碑が立てられた。文成6年(1823)ころ作成の古過去帳から藤九郎の別称が茂右衛門である。元禄6年の「知清童女」の石碑が既にあり、当時はここを蘭塔場と呼んでいた。火災の少し後に、縁起の端に山神社(大山積神社)が、現在蘭塔場と呼んでいる小山には観音堂を設けた。明治11年(1878)、広瀬宰平が石碑を現在蘭塔場と呼んでいる小山に上げた。そして大正5年(1916)の採鉱本部の撤退で、蘭塔場の石碑は瑞応寺の西墓地に移された。

**消去法で考えると、第七の男が考えられる。古過去帳に「一誉浄園」を見つければ解が得られる。**

### 3. 泉屋叢考13輯<sup>しゅう</sup>一切り上り長兵衛

2016.2.16 坪井利一郎

○序言 従来の誤謬を逐一訂正して其の真相を正す。

○書物

垂裕明鑑 一一一 豫洲別子銅山初発之書付(田向重右衛門の手記の覚書)  
豫洲別子御銅山未来記という覚書  
別子銅山公用帳  
別子開坑二百五十年史話一一一 豫洲別子銅山初発之書付(田向重右衛門の手記の覚書)  
伊豫国宇摩郡別子山村足谷御銅山新見立之覚  
垂裕明鑑

(現地踏査を織り込み小説的筆法で綴り、資料収集検討が不十分で、正鵠を得ていない)

住友物語 一一一 垂裕明鑑

(資料収集検討が不十分で、正鵠を得ていない)

○長兵衛が伝えた記述

伊豫国宇摩郡別子山村足谷御銅山新見立之覚、豫洲別子立川両銅山開発覚書、豫洲別子御銅山未来記一一一 立川銅山で働いていた長兵衛が吉岡銅山の田向に別子山の鉱床を知らせたとある。

○文書の成立年

元禄3年(1690)から

伊豫国宇摩郡別子山村足谷御銅山新見立之覚一一一 宝暦9年(1757) 69年後

豫洲別子立川両銅山開発覚書 一一一 宝暦8年(1758) 68年後

豫洲別子御銅山未来記 一一一 明和3年(1766) 76年後

○長兵衛が廻った鉱山

たからの山 一一一 出羽・三河・美濃・若桜・出雲・石見・播磨・豊前・豊後・薩摩

○誤記

別子開坑二百五十年史話—— 全国を回らずに阿波から吉岡に来ている。

○長兵衛の発見年と立川銅山経営者

豫洲別子立川両銅山開発覚書—— 貞享年中と記しているが —— 真鍋弥一左衛門  
未来記の2年前→元禄元年となる

伊豫国宇摩郡別子山村足谷御銅山新見立之覚—— 元禄2年 —— 真鍋弥一左衛門  
しかし、真鍋弥一左衛門の立川経営は元禄3年からなので、長兵衛の発見は合わない。  
豫洲別子銅山初発之書付の貞享年中の通報にしても、稼業出願が元禄4年では遅い。

豫洲別子御銅山未来記の報告を誤伝としても2年間の空費は真実性があるが、「豫洲立川銅山覚書」以下では真鍋弥一左衛門の立川稼業は元禄5年となっている。立川村庄屋神野家の真鍋弥一左衛門の稼業は元禄5年。元禄8年の抜き合い論争では元禄4年請負とあるので稼業は元禄5年以降となる。合わない。

長兵衛の立川銅山での稼業は真鍋弥一左衛門の時ではない。真鍋以前に立川銅山は稼業していなかった記述がある。

田向重右衛門の元禄3年の現地調査で、立川からでなく土居から入山したのは、立川銅山を避けたと考えられる。

神野家の記録には立川銅山経営の5人は記載されている。記録は明治15年作製なので不確実な点がある。立川には寛永間符、寛永谷の名称がある。

元禄7年の大火の時の立川銅山は金子源次郎が稼業していたとある。真鍋弥一左衛門の立川銅山稼業は元禄7年以降となる。

○住友に報告したなぞ

当時稼業の立川銅山や現在稼業の白石銅山に言わず、なぜ住友か。

別子開坑二百五十年史話の記述の「世話になった住友、すぐに知らせた」は不審。しかし、吉岡銅山も水抜きで苦闘、立川銅山にわたっても芳しくなく、財力のある住友でないと別子銅山開発は困難と考えたとの解釈できる。別子銅山は見立てた時はたいしたことはないと考えて2年間言わなかったとも考えられる。

○実地踏査

伊豫国宇摩郡別子山村足谷御銅山新見立之覚—— 助七が調査後、田向が再調査  
豫洲別子立川両銅山開発覚書 —— 助七が調査後、田向が再調査  
垂裕明鑑 —— 踏査より35年後享保9年の田向の手記  
踏査が1年間違う 田向の時に助七がいない  
男一人を未来記から長兵衛としているが、長兵衛ではなく松右衛門である  
開坑二百五十年史話 —— 踏査より35年後享保9年の田向の手記  
踏査が1年間違う 田向の時に助七がいない

史料をつき合わすと時間的につじつまが合わないので、長兵衛については疑義が残る。その後の出筆には、別子開坑二百五十年史話の影響が大きく、歴史話なのに史実と間違っ広まっている。住友別子鉱山史(300年史)では、長兵衛の報告は伝説としている。

#### 4. 泉屋叢考<sup>しゅう</sup>13 輯 - 別子銅山火災関係資料

焼死人 132人 (内訳合計は142人、上記数字と相違あり)

内 河野又兵衛殿

泉屋助七

同 手代 5人

同 役人 4人

床屋者 男 14人

同 女 2人

同 土持 2人

堀子 23人

同 女房 22人

同 子供 12人

焼釜方 3人

同 女房 3人

日用 49人

焼釜方子共 1人 (後に、10名の誤差は火急の際の間違いかとある。)

死人銘々名書

7人 勘場

助七 藤九郎 宇右衛門 善兵衛 (古過去帳では、藤九郎は茂右衛門である)

ㄨ 4人は大坂より下ル者共

次郎太夫 与州河江之者

彌五平 備中銅山より参候者 (平と兵衛は同音ベエである)

男吉兵衛 備中松山之者

ㄨ 7人

1人 河野又兵衛殿 (碑石では亦兵衛である)

61人 堀子

2人 多田茂兵衛、同女房

2人 石見惣兵衛、同女房

1人 銅丸仁右衛門

4人 東儀十兵衛、同女房、同男子2人

1人 高山小左衛門

1人 廣島七郎右衛門女房  
1人 阿波庄三郎  
2人 金川八右衛門母、同子虎之介  
1人 百合長右衛門女房  
1人 讃岐善四郎  
1人 大森太兵衛女房  
1人 阿波仁右衛門母  
1人 尾道金兵衛  
2人 阿波一郎右兵衛孫兵衛、同堂右衛門女房  
2人 大坂六兵衛母、同女房  
2人 阿波左市右衛門女房、同親太郎右衛門  
4人 さくら庄三郎、同女房、同子1人、娘1人  
1人 阿波源右衛門  
2人 同庄八、同母  
1人 備中市太夫  
2人 同仁右衛門、同女房  
3人 吉田加兵衛、同女房、同男子1人  
1人 廣しま平左衛門  
3人 多田七郎兵衛女房、同男子2人  
1人 吉田久三郎  
3人 三原安右衛門、同女房、同母  
2人 丹波勘三郎女房、同娘1人  
1人 岩見三平母  
1人 鍛冶長右衛門娘  
1人 蕪崎吉介  
1人 阿波喜兵衛女房  
1人 熊野四右衛門  
1人 小松市兵衛  
1人 讃岐市兵衛  
1人 蕪崎清八  
1人 鍛冶金兵衛  
1人 銀山與平次  
1人 阿波権介  
1人 蕪崎七介  
1人 かべ仁兵衛母

〆如此

20人 床屋者

- 1人 日向六兵衛娘
- 1人 萩生市右衛門
- 1人 三原八兵衛
- 1人 備中太兵衛
- 2人 阿波新吉、同女房
- 1人 熊野傳三郎
- 2人 阿波與兵衛、同女房
- 1人 同唯之丞
- 1人 吉田平八
- 1人 同久七
- 1人 山形兵右衛門
- 1人 寒川勘七
- 1人 河江太郎兵衛
- 3人 阿波萬兵衛、同女房、同男子
- 2人 備中半左衛門女房、同娘

〆如此

11人 日雇

- 2人 江村利兵衛、同女房
- 1人 小松松右衛門
- 1人 江村茂左衛門
- 1人 同吉兵衛
- 1人 小松三四郎
- 1人 焼大工利兵衛女房
- 1人 同市右衛門女房
  
- 1人 <sup>カミ</sup>上分八郎衛
  
- 1人 永田介兵衛
- 1人 上野佐右衛門

〆

32人 死人 是ハ名所知不申候

合計 132人 但し先達而142人と申来候、此度132と申来ル、10人違い有り



## 5. 瑞応寺碑石と古過去帳と実相寺の供養塔・墓のタイムラグ

別子大火災	瑞応寺碑石	古過去帳	実相寺供養塔・墓
元禄7年			嘉永4年(嘉永7年)
1694年		1823年頃	1851年(1854年)
	← 130年間	→	←29年間(32年間)→
<b>俗名</b>			
助七	玉誉一的居士	玉誉一的信士	玉誉一的
藤九郎(茂右衛門)	心月窓入	心月窓入信士(心月窓入)	心月窓入
宇右衛門	香月道輝	香月道輝	香月道輝
善兵衛	嶺月道晶	嶺月道晶	嶺月道晶
次郎太夫	教甫信士	宗知信士	宗知
彌五平	道慧信士	教甫信士	教甫
吉兵衛	—	宗甫信士	宗甫
河野又兵衛	釈道仙信士	道恵信士	真覚道恵信士

受講者の門倉秀公氏の質問から、古過去帳の中で心月窓入信士(心月窓入)から茂右衛門は藤九郎である点に注目して、詳細に見ていなかったのが精読する。

助七、藤九郎(茂右衛門)、宇右衛門、善兵衛の4人は、瑞応寺碑石と古過去帳と実相寺供養塔は一致する。次郎太夫、彌五平、吉兵衛、河野又兵衛の4人は、古過去帳と実相寺供養塔・墓は一致するが、瑞応寺碑石と古過去帳、実相寺供養塔・墓では齟齬が起きている。別子大火災から古過去帳までの百年余りの間に齟齬が起きたようである。古過去帳と実相寺供養塔・墓までは29年間(32年間)と一世代の間隔なので、その間には齟齬が起きていない。住友の史料でも垂裕明鑑は間違いが多いので公開しなくなっている。別子大火災での立川銅山からの迎え火も誤報であったと訂正されている。

住友の手代は教養として和歌などの芸事をたしなんでいたもので、雅号などを持っていて、吉兵衛は戒名を複数持っていたと考えられる。坪井も得度して茶名・宗十、華名・松玄斎土甫、行者名・山水を保持している。齟齬が起きていることから、消去して残った一誉浄圓信士が古過去帳の吉兵衛に当たる。

心月窓入、香月道輝、嶺月道晶の戒名には、陰の世界の「月」がつけられている。宗知、教甫、宗甫は、現在の華名や茶名の命名である。

**実相寺供養塔・墓の建立は、嘉永4年・嘉永7年と推定。**

**墓の歴史を見れば、明和年間(1781~1788)頃から墓が設置され始め、文化年間(1804~1817)頃になると本格的な設置となる。嘉永年間(1848~1853)は、文化年間から約30年後である。旧**

別子の墓調査では、寛延年間(1748~1750)までの58年間は、墓は確認されていない。元禄7年の別子大火災時の手代も碑石と説明されている。

## 6. 別子銅山の開坑

三島村の祇太夫が開坑以前に試掘している。住友が申請する前に金子村の源次郎が請願し、尾張留右衛門が出願したが許可されなかった。住友が出願したときにも他に出願者があった。別子開坑より約60前に嶺北で立川銅山が稼働している。銅山峰の大銅鉱床の存在は周知のことであった。嶺北はなんとかアプローチできて開発されていたが、嶺南になるとアプローチも困難で、莫大な資金を要する。吉岡銅山で行き詰まっていた住友も、次の銅山を決めなくてはいけない状況下にあった。幕府も対外貿易の支払いとして銅は重要品目であり、零細経営者でなく資金と経験のある住友を選択した。

石見銀山の発見も、博多の商人である神谷寿禎が日本海を航行していて、光る山を見て開坑したとの話から始まる。海上より山並みを観察して、火山性の山容から鉱脈を推定したのであった。鉱山開坑譚は、科学的見地ではなく御伽話的なストーリーで始まる。別子銅山開坑も一つの開坑譚として語られたと考える。

別子銅山の調査時の案内人は、当然、現場を知っている長兵衛でないといけないのにいない。吉岡銅山の配下の稼ぎ人なら、命令すれば従事するはずである。この時点で長兵衛はいないのである。住友が別子山村にある銅鉱床を調べるには、単に道案内人がいれば済んだ。住友のこれまでの鉱山経営の経験から、現地を見て調査すれば別子鉱床の規模は判断できたのである。ヘビノネゴザのシダや銅気(塩基性)による植生の劣地を指標に探るのであった。地層の走行からは露頭線・ヒスジの方向が推測できた。大露頭、大露頭の東の露頭、歓喜抗は谷筋に位置する。伊藤玉男も中学生とヘビノネゴザを指標にして中萩の山中に新生鉱山跡を探し当てている。調査隊は、大露頭下80mに含銅量20%を確証して帰ったのである。

別子開坑二百五十年史話では、松明の下に富鉱をついに掘り当てたとあるが、一日中露頭線上を調査し終え、日も暮れてきたので、下刻された谷底(歓喜・歓東抗が後に開坑された箇所)で試掘して、有望な鉱山の確証を得たのであった。道なき山中を一日がかりでたどり着いたのは、密林を進んだとの脚本である。当時は木材需要から山林の切り出しが進んでいたもので杉道も出来ていた。石鎚回峰行では山中32kmを29時間で歩く。回峰行の途中で4時間30分は道がないが、歩く速度はほとんど変わらない。現在でも辻が峰・黒森の尾根から大野山までを藪漕ぎをしながら15kmを10時間で走破する強者もいる。山中の走行速度は1.1~1.5km/hである。別子鉱床探索を1.0km/hとすると、別子本村から大露頭までの10kmの距離には10時間かかる。9月の七つ立ちだから新暦では10月の朝の4時の出立で、14時には大露頭に到着する。調査時間は日没の17時まで3時間ある。峰~大露頭~歓喜・歓東抗の600mを調べた結果として、日没後に歓喜・歓東抗の箇所で富鉱を掘りあてた。

## 7. 別子銅山は国内最高位置の鉱山

別子銅山及び立川銅山は、標高1310mの銅山峰の南と北にあり、その露頭線は嶺北の標高1150mから始まり嶺南の標高1150mまで約1500m続いている。最高点での坑口は大和間符で標高1280mである。佐渡島の最高峰である標高1172mの金北山よりも高い位置にある。

釜石鉱山の板野や足尾鉱山は、板野川や渡良瀬川を遡上すればいいが、別子銅山は赤石山系の標高1266mの峨蔵越え、標高1256m小箱越え、標高1294mの銅山越えの峠を越えて行かねばならない困難が伴っている。

### 鉱山と標高

別子	1280m大和間符	
	1203m歓喜間符	
	1160m東延	
	1096m代々坑	
	840m日浦登山口	(佐渡の金北山 1172m)
立川	1225m大黒間符	
釜石・橋野	900m	
足尾	700m	
尾去沢	530m	
石見	480m	
日立	400m	
鴻之舞	400m	
鯛生	400m	
阿仁	400m	
院内	350m	
長登	341m	
小坂	270m	
菱刈	250m	
和同	270m	
佐渡・遊道割戸	164m	
阿仁	100m	

### おわりに

昭和16年(1941)に別子開坑二百五十年史話が刊行されてから、平成3年(1991)に住友別子鉱山史が刊行されるまで別子銅山の正史はなかった。この51年間は「鉱山の話」が元本となって語られてきた。泉屋叢考<sup>しゅう</sup>13輯で、「切り上り長兵衛に関する従来の誤謬を逐一訂正して其の真相を正す。」とあることは顧みられなかった。切り上り長兵衛の登場が開坑譚となると、従来の歴史の読み方は違ってくる。

別子銅山史の留意点でも指摘してきたが、間違った情報を前提にしていろいろな本が出版されてきているので、正しく別子銅山史を読むのは至難の業でもある。幸いにも住友別子鉦山史の刊行後に、住友の歴史(上)(下)が刊行されて史実を分かりやすく述べてくれている。瑞応寺西墓地の元禄時代の碑石も伝説の人を居ると考えるから、碑石の無い手代が生まれてくる。実在が確定している手代を優先すれば、謎の人物の碑石は存在しなくなる。

別子銅山史を紐解くには、インドア・ワークとフィールド・ワークの両面からの研究に元づく総合力が肝要である。別子銅山の世界を正しく知るためには、銅山に係わった人々の生活を含めて、全てのモノについての正確な知識を持たねばならない。ところが実際は、別子銅山を語る人が持っている知識は、極めて少ない。それ故に、1頁でも多くの読書が必要である。また複数の目で読み解いていくことも重要である。